

第 12 回日仏先端科学(JFFoS)シンポジウム実施報告書

Planning Group Member 日本側主査
京都大学高等研究院物質-細胞統合システム拠点・主任研究者/准教授
藤田 大士

シンポジウムの会期中、休み時間になるたび、私はスマートフォンの写真を拡大し、せわしく会場中を歩き回っていた。結果だけを見れば、日仏の参加者のあいだをまめに行き来している人物である。それはたしかに、JFFoS において悪い姿ではない。

二国間シンポジウムには、放っておくと相分離が起きる。もちろん化学の話ではない。日本側の参加者は日本側で、フランス側の参加者はフランス側でまとまる。非母国語で話しかける前の一瞬のためらい、同じ国の人という安心感、知っている顔を見つけたときの吸着力。人間関係にも、なかなか侮れない分子間力がある。

その相分離をどう越えるかは、JFFoS のような場では大事な課題である。だからこそ、誰かが輪をまたいで動いていると、それなりの意味があるように見える。私の行動も、外からはそう見えたらしい。シンポジウムの終盤、複数の先生方から「藤田先生は、いろいろなグループに積極的に入って話しかけていて偉いですね」という趣旨の言葉をいただいた。ありがたい言葉である。ありがたいのだが、私は一瞬、何のことか分からなかった。日仏の若手研究者の間を優雅に取り持ち、主査として軽やかに橋を架けていた記憶は・・・ない。私の記憶にあるのは、もう少し別の切実さであった。

セッション初日の夜、希望者を募って二次会を開いた。幹事は私である。30 人近くが参加してくれ、会は盛り上がった。時間も遅くなるにつれて、一人、また一人と自然に席を立ていく。いかにも有志の二次会らしい、ゆるやかな流れ解散であった。

皆さん、各自が食べた分の飲食代はきちんと置いていってくれた。そこは誠実で、たいへんありがたい。しかし居酒屋には、飲食代のほかに、お通し代という文化がある。幹事業から離れて久しい私は、そのことをすっかり失念していた。

一人 500 円。一人だけなら、まあいいかと笑って済ませたくなる額である。ところが 30 人規模になると、やや顔つきが変わる。会から出るお金ではない。自分の財布である。少々心に響く。

翌日から、私は当日の写真を手がかりに未回収分を追った。講演中に「すみません、お通し代を」と切り出すわけにはいかない。残された時間は、セッション 2 日目と 3 日目のランチタイム、コーヒープレイク、その他わずかな合間時間だけである。

参加者リストと二次会での写真を見比べる。テーブルの配置を思い出す。この方は二次会にいたか。払っていただいたのだろうか。同じテーブルには誰がいたか。フランス側の参加者だけで話している輪にも、入っていかなければならない。普段なら少し躊躇する場面である。会話の流れを止めてしまわないだろうか。英語がうまく出てこなかったらどうしよう。そういう遠慮が、国際交流の界面を厚くする。

しかし、そのときの私は違った。なにしろ、自分の財布がかかっている。

写真を見せながら「この方はどこにいますか」「あなたのテーブルには他に誰がいましたか」と尋ね、証言をつなぎ、次の輪へ向かう。必死だったので、遠慮している暇がなかった。言語の壁も、専門分野の壁も、国籍の壁も、こちらの財布に空いた穴に比べれば、ひとまず後回しである。

その姿が、周囲には「積極的にさまざまなグループへ入り、交流を促している主査」に見えたらしい。ものは言うようである。実態は私の幹事としての不手際であり、本来なら反省すべき話である。それが、まわりまわってプラスに評価していただけたとは、私はなんと運がよいのだろう。次に同じことをすれば、ただの会計ミスである。今回だけは、失敗が少しよい話の顔をして戻ってきた。

ただ、結果として私は、普段なら入りにくい輪へ何度も足を踏み入れ、写真を一緒にのぞき込みながら会話を重ねた。最初の用件はお通し代でも、その後に続いた会話はお通し代の回収以上の価値があった。具体的な用件や、放っておけない疑問は、ときに会話の入口になる。手に何かを持って輪の中へ入ると、境界は少しだけ薄くなる。この小さな会計上の失敗は、結果として、FoS という会議の本質を思いがけず具体的に教えてくれた。

専門の外へ出るための会議

第 12 回日仏先端科学(JFFoS)シンポジウムは、2026 年 6 月 4 日から 7 日まで東京で開催された。日本学術振興会(JSPS)とフランス国立科学研究センター(CNRS)の協力のもと、日仏双方の若手研究者、Planning Group Member(PGM)、スピーカーが集まり、6 つの分野にまたがる先端科学のトピックについて議論を行った。

FoS シンポジウムは、通常の学会とは性格が大きく異なる。通常の学会では、同じ分野の研究者が、共有された専門知識を前提に、成果の正確さや新規性を議論する。FoS では、参加者の多くがそのセッションの専門家ではない。むしろ、専門外の参加者が、普段なら触れることのない領域に飛び込み、自分の分野の言葉や経験を手がかりに質問することが期待されている。

私が PGM 主査として開会時に強調したのも、この点であった。セッションだけでなく、ポスター、食事、移動、休憩時間を含め、参加者全員が自分の専門の外へ出ること。そのとき、必ずしも「正しい質問」や「専門的な質問」を目指す必要はない。専門外だからこそ生まれる素朴な質問が、発表者自身にとっても研究の意味を考え直す契機になる。

FoS シンポジウムの制度的な立て付けや、PGM、スピーカー、参加者がどのように会期を過ごすのかについては、過去にも優れた実施報告書がある。たとえば、[井上飛鳥\(2025\)「第 6 回日米独先端科学\(JAGFOS\)シンポジウム実施報告書」](#)は、FoS の全体像、参加者の役割、会期中の過ごし方を知る上で有用である。ここでは制度の説明を重ねるよりも、今回の会場でどのような質疑が交わされ、議論がどのように広がっていったのかを見ていきたい。

今回の JFFoS で印象的だったのは、質疑を通じて、研究が別の分野の言葉へ置き換えられていく様子であった。ここでいう置き換えとは、英語と日本語の間の翻訳ではない。ある分野の研究内容を、別の分野の研究者が、自分の対象、方法、社会的関心、価値判断へと置き換えて理解しようとする営みである。発表者が一つの研究を会場の中央に置くと、専門の異なる参加者が、それぞれの方角から手を伸ばし、自分の言葉のほうへ引き寄せていく。その引っ張り合いが、本シンポジウムの議論の中心にあった。

質疑には作法の違いがあった

各セッションは、PGM による導入、イントロダクトリー・スピーカーによる背景説明、2 名のスピーカーによる講演、そして 55 分の質疑応答から構成された。55 分は、通常の学会の質疑応答から見ればかなり長い。しかし今回、質問者の列が時間内に途切れたことは一度もなかった。日仏双方から絶えず質問が出され、たいへん活発な討論になった。

ここで見てきたのは、質問の数そのものよりも、その作法の違いであった。同じ発表を聞いていても、日仏の参加者はしばしば、議論を少し違う方向へ進めようとしていた。

あくまで今回観察された傾向としてだが、日本側の質問は、発表を具体的な場面へ引き寄せることが多かった。この顕微鏡を日常の実験でどう使い分けるのか、このモデルは COVID-19 や山火事にどうつながるのか、この材料はコスト、pH、消費者行動の中で本当に成立するのか。問いは、研究を応用、実験条件、制度、社会実装の中でどう働かせるかへ向かっていた。

一方、フランス側の質問は、発表を抽象概念や前提の側から捉え直すことが多かった。イメージングは植物科学にとって便利な補助技術なのか、それとも知識生産に不可欠な条件なのか。抽象モデルはどの極限で正当化されるのか、active matter という概念はどこまで届くのか、研究者はそもそも誰の立場から責

任を語るのか。こちらは、一つの研究を、概念の境界、モデルの妥当性、価値の構造という大きな枠の中へ置き直そうとする問いだった。

会場で聞いていると、この違いは質問の組み立て方にも表れていた。全体として大きな差ではないものの、フランス側の質問には、答えだけでなく、比較の軸や価値判断を問いの中にあらかじめ組み込むものが目立った。質問はしばしば、それ自体が小さな問題提起として会場に投げられていた。

この違いを国民性の話として固定してしまうのは行き過ぎである。それでも興味深かったのは、セッションの主題によって、この傾向がはっきり強まる場面があったことである。実用に近い材料を扱った Session V では、コスト、pH、分解環境、消費者行動など、具体的な実装へつなげる日本側の質問が活性化した。一方、倫理を扱った Session VI では、責任、価値、権力、研究者の立場といった抽象概念を掘り下げるフランス側の質問が目立って増えた。テーマが実装へ近づくると具体的な条件や使い方を確かめる質疑が増え、テーマが価値や責任へ近づくると概念を掘り下げる質疑が増える。その作法の違いは、今回の JFFoS で得た興味深い発見の一つであった。

それでも、二つの問いの向きが互いを必要としていたことは確かである。具体へ向かう問いだけでは、議論は個別の手順に閉じてしまう。抽象概念へ向かう問いだけでは、議論は現場の手触りから離れてしまう。両方があったからこそ、発表はその場に留まらず、別の分野へと運ばれていった。

六つのセッションで問われた境界

会期は、Biology / Life Sciences、Mathematics / Informatics / Engineering、Physics / Astrophysics、Earth Science / Geosciences / Environment、Chemistry / Materials Science、Social Sciences / Humanities という六つの分野枠で進んだ。植物を見えるようにする技術から、ネットワーク上のランダムな振る舞い、集団運動、災害と人間活動、循環型材料、技術社会の価値と倫理へと、議論の対象は大きく移っていく。分野は変わっても、参加者はそれぞれの研究を自分の言葉へ置き換えながら、その「境界」へ向かっていた。

Session I: 見えることは、理解することなのか

Session I「Uncovering Plant Biology with Cutting-edge Imaging Technology」では、先端イメージング技術を通じて、植物生物学をどのように「見える」ものにするかが主題となった。植物細胞の細胞壁、オルガネラ、蛍光タンパク質、カルシウムシグナル、胚発生のライブイメージング、器官の成長などが紹介され、固定標本の構造観察と生細胞の動態観察をどう組み合わせるかが軸となった。

会場の関心は、単に「どれだけ高解像度に見えるか」には留まらなかった。何を標識できるのか、複数の顕微鏡を日常研究でどう使い分けるのか、光を当てる観察そのものが植物の振る舞いを乱してしまわないのか。そして、顕微鏡で新しい構造が見えたとき、それをアーティファクトと意味のある現象とでどう区別するのか。ある参加者は、AI 画像処理が研究を一変させる一方で、過剰な外挿や画像解析の信頼性にどう向き合うかを問うた。どの問いも、技術の性能表ではなく、技術が知識へと変わっていくその道筋のほうを向いていた。

そこへ、技術そのものの位置づけを問う声が重なる。イメージング技術はどの分野で生まれ、どのように他分野へ波及するのか。植物科学にとって、それは研究を速める便利な装置なのか、それとも、なければ問いそのものが立たない不可欠の条件なのか。「見えること」は「理解すること」と同じなのか。最初のセッションから、実験条件を確かめる問いと、技術の意味を広く捉え直す問いが呼応していた。

Session II: 抽象モデルを、現実へ戻す

Session II「Random Dynamics on Networks」では、ネットワーク上のランダムダイナミクスが、数学的モデルであると同時に、現実世界の多様な現象を記述する言葉として提示された。感染症の拡大、意見形成、交通渋滞、森林火災、voter model、forest fire model、frog model、相転移や普遍性などが並び、局所的なルールやランダムな相互作用からマクロな振る舞いが生まれる過程が示された。

質疑応答では、抽象モデルをどうやって現実へ戻すかが繰り返し問われた。COVID-19 以降の感染拡大モデルは実データでどこまで検証されたのか、山火事のシミュレーションで森林と建物をどう描き分けるのか、気象モデルや材料設計へはどうつなげるのか。いずれも、数式やシミュレーションで示されたモデルを、具体的な応用場面へ結び直そうとする問いだった。

それと向き合うように、抽象化そのものの妥当性を問う声もあった。偏微分方程式への極限、非局所相互作用、シミュレーションと証明の関係、さらには「数学において『なぜ』と問うとは何を意味するのか」という、根本へ向かう問いである。現実に見えるかという問いと、どの抽象化なら正当化されるかという問いが、同じモデルを挟んで静かに向かい合っていた。数学が、閉じた専門領域としてではなく、他分野を橋渡しする一つの言語として扱われていたのが印象に残っている。

Session III: 集団は、いつ集団になるのか

Session III「Collective Behaviours and Their Simulations」では、collective behaviour と active matter を中心に、個体レベルの運動から、集団レベルのパターンや流れがどのように生まれるかが主題となった。自己駆動粒子、flocking、非平衡物理、topological defect、細胞集団、組織や心臓におけるパターン形成など、物理と生命現象をまたぐ話題が並んだ。

会場で中心的な論点の一つになったのは、active matter という概念をどこまで広げてよいのか、という問いであった。集団運動は何個体ほどから成立するのか、鳥群や魚群の解析と自己駆動粒子の解析は同じ道具で扱えるのか、癌や交通や再生工学にまで応用できるのか。こうした問いの多くは、この枠組みを自分の対象系へ移植できるかを、その場で試すものだった。同時に、個体と集団の差、生命らしさ、トポロジー、粒子モデルと実際の生物集団との距離を問う声も続いた。

ここで交わされていたのは、「active matter とは何か」より、「どこまで active matter と呼べて、どこから別の記述が必要になるのか」という問いである。専門外からの質問は、概念を乱すものではなく、むしろ概念の輪郭を確かめるための手触りになっていた。

Session IV: 災害を、自然現象だけにしない

Session IV「Human Impact and Disasters」では、災害が、純粋な自然現象としてではなく、人間活動、土地利用、気候変動、インフラ、都市化、脆弱性が組み合わさって生じる現象として語られた。地すべり、土石流、山火事、沿岸災害、リモートセンシング、AI、digital twin などに取り上げられ、観測から予測、さらに行動や政策へどうつなぐかが議論された。

序盤の議論を立ち上げたのは、現場の経験に根ざした問いだった。近年の日本の山火事は、地域の伝承のなかであらかじめ予期されていたのではないか。市民科学は災害防止に使えるのか。災害の種類によって、避難の戦略はどう変わるのか。ある参加者は、海洋観測がすでに in-situ センサーで自動化されているのと同じように、陸上の現地調査もこの先 AI やドローンや LiDAR によってどう変わっていくのかと問うた。いずれも、研究成果が現場でどう使われるかへと議論を引き寄せる問いである。

他方で、予測の仕組みそのものへ向かう問いも続いた。digital twin はどこまで未来を言い当てられるのか、地すべりの前にはどんな警告サインが現れるのか、そして温暖化は、極端現象の分布の平均値だけでなく、その「裾」の形までも変えてしまうのか。予測モデルをどう作るかという問いと、その予測を誰がどう使うかという問いが、同じ災害を両側から照らしていた。災害は外から突然やって来るのではなく、どこに住み、どのデータを集め、誰へいつ警報を届け、どの制度で避難を支えるかによって、その大きさを変えていく。質疑を通じて浮かび上がってきたのは、自然と社会を切り分けて考えることの限界であった。

Session V: 作る化学から、ほどく化学へ

Session V「Circular Materials: The Chemistry of Making and Unmaking / The Chemistry of Reuse」では、化学が長く磨いてきた「結合を作る」技術から、「必要なときに結合をほどく」「再利用・分解・再加工できる材料を設計する」方向への転換が示された。プラスチックやポリマーを、丈夫で

長持ちするものとして作るだけでなく、使用後にどう壊し、どう戻し、どう循環させるかを分子設計の段階から考えるという問題設定である。バイオマスやセルロース、reversible covalent chemistry、covalent adaptable networks、vitrimers などが取り上げられた。

六つの中で、最も実装に踏み込んだセッションであった。質問は、分子設計の美しさだけには向かわなかった。海だけでなく、土壌や河川、雪山、深海の堆積物といった多様な環境で、その材料は本当に分解するのか。合成のコストはどれくらいかかるのか。海水の pH や水質の差を、実験室でどう代表させればよいのか。分解性はリサイクルと矛盾しないのか。そして、たとえ新しい材料が完成しても、使い捨てという消費者の行動そのものは残るのではないのか。なかでも目を引いたのは、「炭素固定という観点に立てば、安定で分解しないポリマーのほうがむしろ有用なのではないか、分解性は本当に必要なのか」という、前提そのものを裏返してみせる問いであった。

こうした問いに、材料がほどけた後の炭素循環や、海へ到達する前の土壌・河川での分解といった、化学と環境過程の接続を問う声が重なる。材料をどう作るかという問いは、材料がどこへ行き、誰が使い、どの時間で環境へ戻るのかという問いへ広がっていった。Chemistry / Materials Science のセッションでありながら、議論はライフサイクル評価、環境倫理、行動変容にまで及んだ。分子を設計することは、分子の外側にある社会や環境を想像することでもある。そのことを、参加者の質問が何度も会場へ引き戻していた。

Session VI: 技術を、誰の価値で動かすのか

Session VI「Human Values and Ethics in a Technological World」では、技術が社会に入る際の価値、倫理、法、ガバナンスが正面から問われた。ELSI/RRI、インターネット・ガバナンス、AI、データ、動物感情認識技術などを通じて、技術を「できるか」ではなく、「誰のために、どの価値を守り、誰が責任を持って展開するのか」という問いとして考えるセッションであった。

このセッションではフランス側からの質問が目立って多かった。研究者は誰の立場を代表して語るのか、基礎研究が悪用につながったとき研究者はどこまで責任を負うのか、デジタルな世界で国家権力はふたたび強まりつつあるのか。ある参加者は、技術を設計するとき子どもがユーザーとして問われない「adultism (大人中心主義)」を指摘した。技術の外側にある価値や権力や責任の枠組みそのものを、正面から問う時間になった。

これに対して、議論を制度設計へと落とし込む問いも力強かった。ELSI をチェックリストで終わらせず、どうすれば技術設計の中に織り込めるのか。倫理要件が新規参入を過度に妨げる制度設計にならないか。AI のバイアスがもたらす不利益の責任を、いったい誰が負うのか。豪州や欧州で進む未成年の SNS 規制を、日本ではどう考えるか。抽象的な価値の問いと、具体的な制度の問いが、最後のセッションでも変わらず往復していた。

研究を社会へ翻訳するとは、単に分かりやすく説明することではない。どの価値を残し、どのリスクを受け、誰とともに決めるのか。最後のセッションがこの問いを正面から扱ったことで、会期全体を貫いてきた「翻訳」という主題が、最も鋭い形で立ち上がった。

セッションをまたいで続く問い

セッションの傾向と並んで興味深かったのは、複数のセッションにまたがって繰り返し質問する参加者が少なくなかったことである。生物学、数学、物理学、地球科学、化学、倫理学。分野はまるで違う。それでも参加者は、自分の専門という同じレンズを携えて、まったく別の研究へ質問を投げかけ続けた。

こうした質問者は、単に発言量が多いわけではない。彼らは各セッションの内容を、毎回自分の分野へ翻訳し直していた。画像処理の知識から植物イメージングを眺める人がいる。倫理の視点から材料科学を捉え直す人がいる。数学の言葉で植物や集団運動を考えようとする人がいる。その姿は、ある部屋で生まれた疑問を次の部屋へ運ぶ、橋渡し役のようであった。

その橋渡しを支えていたのが、JFFoS の質問に特徴的な作法である。多くの質問は、「私はこういう分野の者ですが」という自己紹介から始まった。そこには、「自分の専門から見ると、あなたの研究はこう見える」という立場表明が含まれている。専門外であることを引け目ではなく入口として使う、学際会議ならではの会話の型である。誰もが半分は素人であるという前提が共有されているからこそ、人は安心して、よく知らない分野にも質問を投げかけることができた。

セッションの外で育つ会話

こうした質問のやり取りは、講演会場の中だけで完結していたわけではない。拍手が終わり、スクリーンが暗くなったあとも、余韻は会場のどこかに残っていた。ポスターの図を指す指先、紙コップを持ったまま少し身を乗り出す姿、名札を見てから「あの質問をした方ですね」と声をかける間。三泊四日という時間の中で、セッション中に生まれた疑問は、少しずつやわらかくなり、人と人との会話へ姿を変えていった。

壇上と客席の間では、「質問」はどうしても整った形を求められる。短く、明確に、発表の流れを止めすぎないように。けれど、セッションの外では、その言葉がもう少し自由になる。図を見ながら考え直してもよい。相手の表情を見て、言い方を変えてもよい。分野の違いを前置きにして、素朴な疑問から入ってもよい。そうしているうちに、先ほどまで講演会場で生まれた疑問が、いつの間にか二人のあいだに置かれている。

研究の話から一度離れる時間も、議論を止めてはいなかった。同じ景色を見て、同じテーブルにつくあいだに、相手は分野名だけの存在ではなくなる。名前と顔が結びつき、話し方が分かり、次に声をかけるまでの距離が少し縮まる。そのあとで研究の話に戻ると、同じ質問でも届き方が変わる。数日をともに過ごす形式だからこそ、FoS の交流は会議室の外でも育つのだと思う。

FoS の有益さは、講演と質疑応答だけで測れるものではない。会期中のさまざまな接点が、素朴な疑問を質問から会話へ、会話から次の関係へと変えていく。短い会期中で、各自の専門が少しずつ別の方向へ伸びていく様子が見えたのは、こうした時間がよく働いていたからである。

おわりに

FoS シンポジウムの魅力は、最先端の研究を知ることだけではない。普段なら出会わない分野の研究者が、専門外の話聞き、分からないなりに質問し、その質問によって発表者自身も研究の意味を考え直すところにある。今回繰り返し実感されたのは、「無駄な質問はない」ということであつた。

植物をどう見るか、モデルをどう現実へ戻すか、集団をどこまで同じ概念で扱えるか、災害にどう備えるか、材料をどう循環させるか、技術を誰の価値のもとで展開するか。一見別々のこれらの質疑は、シンポジウムを通じて、「研究の境界をどこに置くか」という共通の論点として浮かび上がった。境界は、専門と専門の間にも、日本とフランスの間にも、研究と社会の間にもある。その境界は、立派な理念だけで越えられるわけではない。参加者がそれぞれの分からなさを手放さず、素朴な疑問として持ち歩いたからこそ、会場のあちこちで次の会話が生まれていた。

私の場合は、正直に言えば金銭的切実さに背中を押されただけである。理想を言えば、誰もがもっと自然に、専門外の輪へ入っていけるのがよい。けれど現実には、少し切実な用件や、放っておけない疑問のほうが、人の足を前に出すことがある。

お通し代をそのままにせず、写真を手に輪の中へ入っていったら、最初に探していたものとは別の会話が返ってきた。今回の JFFoS で参加者が互いに投げかけていた質問も、少し似ていると言ってよいのかもしれない。素朴な疑問をそのまま持ち帰らず、誰かの前に置いてみる。そこから次の会話が生まれ、別の問いが生まれ、会期後にも続く関係が生まれる。未回収の疑問をそのままにできなかったことこそ、本シンポジウムが会期中、そして会期後へ手渡した成果であつた。

最後に、今回の JFFoS の開催にあたり、多大なご尽力をいただいた関係各位に心より御礼申し上げたい。JSPS および CNRS の皆様には、企画段階から会期中の運営に至るまで、日仏双方の参加者が安心して

議論に集中できる場を整えていただいた。とりわけ、事務局の皆様には、プログラム、移動、食事、会場運営、参加者間の連絡調整に至るまで、表には見えにくい膨大な実務を細やかに支えていただいた。FoS のような濃密な合宿形式の会議は、こうした運営の積み重ねがあって初めて、自然な交流の場として立ち上がる。

FoS シンポジウム事業委員の先生方には、準備段階から多くのご助言とご支援をいただいた。ともにセッションを構想し、議論の流れを支えてくださった PGM の皆様、専門外の聴衆にも届くよう研究の入口を開いてくださったイントロダクトリー・スピーカーおよびスピーカーの皆様にも、深く感謝申し上げます。そして何より、分からなさをそのままにせず、質疑として会場へ差し出してくださった参加者の皆様が、本シンポジウムを実りあるものにしてくださった。

東京で生まれた対話と、会期後も残る問いが、日仏双方の研究者の次の交流と、新しい学際的な問いの形成につながっていくことを期待している。



専門も国籍も超え、一枚の写真に収まった、JFFoS 2026 の参加者たち。



会期の流れを舞台裏から支えた、日仏 Planning Group Member



Session Coordination Meeting. プログラム上はすでに同じチーム、対面ではまだ「はじめまして」である。



会期前半は、テーブルごとの座席指定に少し背中を押しもらいながら、交流が始まった。



何度か食卓を囲むうちに、境界は少しずつ薄くなっていく。



質問者は二列のマイク前へ。用意された質問時間は長かったが、会場の好奇心はそれより少し大きかった。



どのセッションでも、質問の列が途切れることはなかった。



前掲写真の Behind the scene. 写真を撮る人間も、気づけば誰かの写真の中にいる。



図を指差しながら話せるだけで、分からなさはずいぶん扱いやすくなる。



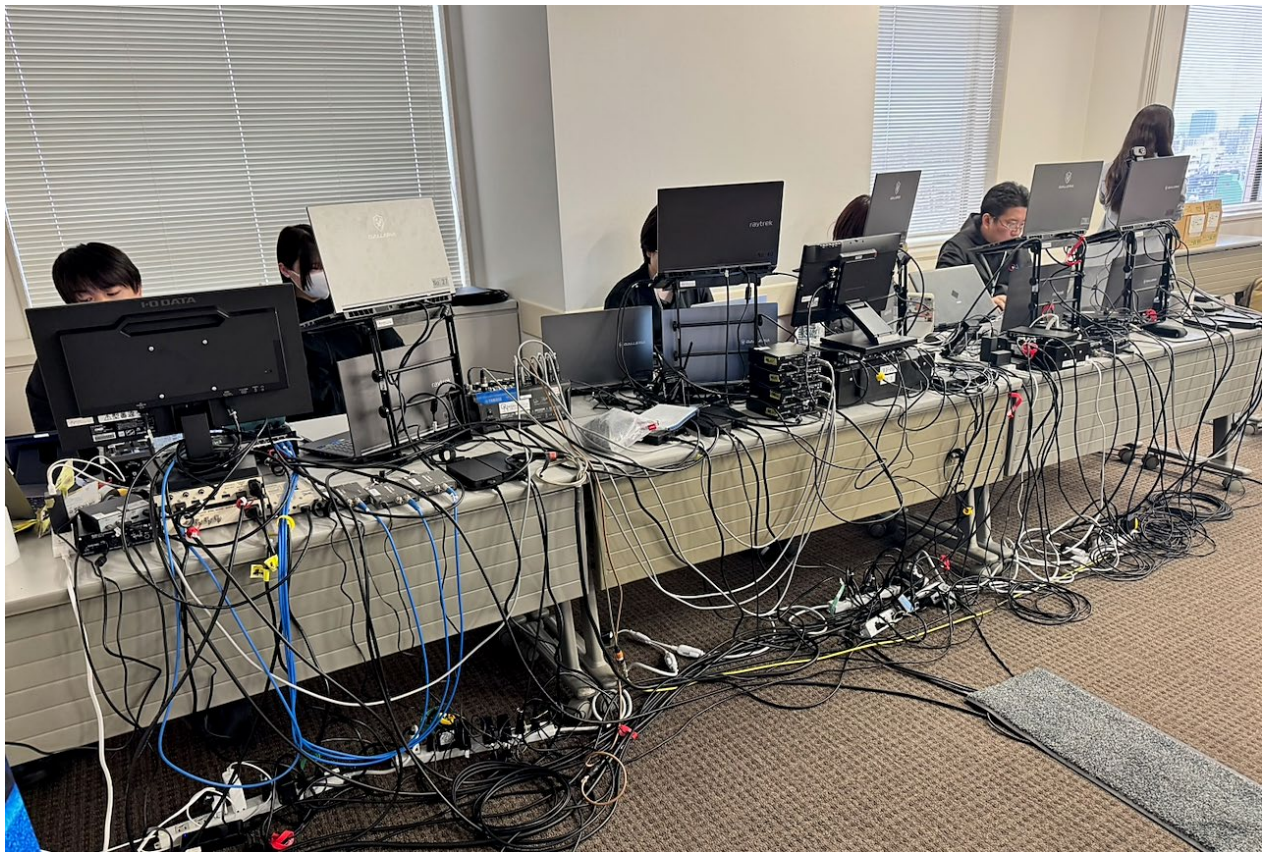
Cultural Tour では、会議室を離れ、江戸の記憶と浅草の賑わいの中へ。



お通し代回収の発端となった二次会。のちに私を会場中へ歩かせることになる。



本家フランス勢を前に並んだクロワッサンたち。なお、冷静に「アメリカンスタイル」との講評を受けた。



スライド一枚を映すために、ここまでの備えがある。おかげで発表は、驚くほど滑らかに進んだ。



専門外へ一歩出るきっかけを探している方は、ぜひ次回以降の FoS へ。